

# 実習実施に向けて

コロナ禍における状況変化への対応

技術センターフィールド科学系部門生物科学班 仲井敏

今年度に担当施設（統合生命科学研究科附属瀬戸内圏フィールド科学教育研究センター食資源機能開発部門 食品製造実験実習工場）で実施した実験・実習の中で特に対応が大変であったもの

## 水産食品製造学実験実習

## 通常であれば

実施内容は基本的に前年通り  
現有の準備計画書による

準備期間は約3週間を目途  
⇒ゾーニングによる衛生管理～受入れ態勢完了⇐

実習内容と進行  
基本的に過去のデータによる

復帰期間は約1週間を目途  
⇒使用設備全般の完全洗浄～原状復帰⇐

## コロナ禍においては

実施内容は基本的に前年通り  
現有の準備計画書による



実施内容の抜本的な見直し  
準備計画書の改定  
実習内容の変更  
部局教務委員会とのすり合わせ  
感染対策の検討など

## 準備計画書の改定

準備・復帰期間の短縮や実習内容の見直し、防疫対策なども含めて改定

当初はシラバス通りに4月中旬に実習実施

警戒レベルの上昇により授業系の情報が交錯

実習実施日延期

8月中



9月上旬



10月初頭

## 実習内容の変更

### 土日を跨ぐ実習の試み

本実習はその特性上、原料を速やかに処理する必要があるので実施期間中に休みを作らない工程で行ってきた。

しかし、今回は、すぐ後に控えている別の実験との兼ね合いでやむを得ず土日を挟んでの実施となり、途中で区切りをつけるために課題を減らし、更に一部の工程を変更する事で対応した。

### 密集を避けるための人数調整

例年は4日間（12：50～16：05）を基本として工程を設定しているが、今回は午前の部（9：30～11：30）と午後の部（13：30～15：30）の2部に分け、半分の人数で実施した。

## 感染対策1

### 毎日の健康状態確認と検温

その当時、教職員や学生は本学の定める行動確認・健康記録表への記入を行っていたが本実習においても施設入口でTAによる独自の受講生への健康状態の確認と検温を行った。（出席確認も兼ねる）

異常のない者のみ入棟し準備を整えて手順通りに手洗いと消毒を行ってから実習室へ入り消毒槽を通過してから待機。

※入棟以降の行動は特にコロナ感染対策ではなく、通常の実習時には必ず行う事になっている。

## 感染対策2

### 作業台の分散による密集の回避

これまでは俎板も兼ねた大型の木製作業台を取り囲むように立ち、作業を行っていたが、これを取りやめて4台のステンレス製のテーブルを設置する事で密集を回避した。



## 感染対策3

### 防疫シールドによるブースの設置

作業台の分散に加えて各テーブルに防疫シールドを設置する事で作業場所のブース化を行った。

これにより受講生は個々で作業を行える状態になった。

## 感染対策4

### 動線を考慮した作業環境の設定

ブース化の欠点とも言える狭隘な場所での作業を可能にするため必要な器具を別のテーブルに設置し必要な物はそこへ取りに行かせるようにし、同時に使用済み器具もブースに残さず運びだす事でスペースの確保を行った。

使用済み器具は直ぐに洗浄するため洗浄用流し台に控えているTAに手渡すが、その際にTAとの位置関係が対面になるので流し台にも防疫シールドを設置し、シールド下部の隙間から器具を手渡せるようにした。

以上の様に作業によってはブースから離れる事があるので工程ごとに基本的動線を想定して移動する者のルートが重ならないように工夫した。

## まとめ

### 「コロナ禍」における実習への影響

本学においても初めての事象で各所で方針が定まらないままに時間だけが経過していた。当施設でもそれにすっかり翻弄されたが得た物は多く、さらなる実習内容の効率化と教育効果の向上、不測の事態への対応力強化など当施設における機能の強化を行う事が出来た。

### 今後についての考察

「コロナ禍」であろうとなかろうと、この度行ってきた手法が今後の実習実施におけるスタンダードとなる。なぜなら「食品製造系実習」は衛生管理の観点からも「感染対策」の手法に通じる物がある事が、本実習を通して証明されたからである。